



上智大生殺害から26年

親友の最期知るため 破った約束

⑤親友の女性が小林順子さんから受け取ったメモ。小林さんの実家に遊びに行った際、女性が門限までに帰れるよう、順子さんが電車の乗り換えを調べて女性に渡した。お守りとして今も大切に持っているという

⑥ジャーナリストを目指していた小林順子さん。シアトル大学に送った荷物の中には、小林さんが尊敬していた筑紫哲也さんの著作もあった。父の賢二さんは「テレビに女性の特派員が映ると、順子もこうなっていたのかなと思ってたまらなくなる」と話す。いずれも東京都、遠藤英波撮影



小林順子さん
—遺族提供

「緊張するよね」
1992年の秋、上智大学の推薦入試の会場。大分から上京し、面接試験に呼ばれるのを待つ間、隣にいた受験生にさう話しかけると不思議そうに返された。

「ご出身はどちら？」
方言が出ていたかな、と思わず笑った。それが、順子との出会いだった。

推薦には落ちて再挑戦した一般入試の会場でも、入学式でも順子と再会し、合格を喜び合った。面接会場で一緒だったもう1人を加えた3人は、他の友人から「割って入れない」と言われるほど仲が良かった。

社会に何かを訴える仕事がないと、順子はジャーナリストを目指していた。「きょうはサポっちゃおう」と誘っても順子は真面目に授業に出席した。そして、米シアトル大の交換留学

「また明日ね」最後になった電話

の切符をつかみ取った。
出国は、96年9月11日に決まった。その前日に帰省先の大分から東京に戻り、見送るつもりだった。帰省中も順子とは2日に1回は電話していた。出発3日前の9月8日も、「また明日電話するね」と約束した。

翌9日の夕方だった。実家の電話が鳴った。大学のサークルの後輩からだ。大学にさう落着いて聞いてね。その後、順子が、殺された。

何がなんだかわからない。涙が止まらず、食べ物ものどを通らない。

最後となってしまった8日の電話で、順子はこんな話もしていた。「あなたにしか話せないことばかりで、いなくなったら困るよ。あなたが100%悪い交通事故で死んだとしても、私、相手の運転手の胸ぐらをつかむよ。私どうしたらいいのって」

なぜこんな話になったのか、よく覚えていない。でも同じ気持ちだった。「順子は何も悪くないのに殺された。この怒りを誰にぶつけたいんだろ？」

事件「一生忘れられることはない」

事件を担当する刑事からは「知っていることはすべて話して」と求められた。

順子は誰かに恨まれる性格の子ではなかったが、「絶対に誰にも話さないで」と打ち明けてくれた。やさしいな悩みもあった。約束を破り、順子の交友関係も含めて話すことに決めた。

捜査が進んで犯人が捕まり、その口から語られる順子の最期を知る役割が、親友である自分にあると思つたからだ。たとえそれが、どんなに悲惨なものだったとしても。

「どんな話でもしますから、犯人を捕まえてください」。そう伝えると、刑事は「絶対に捕まえるから」と涙を流した。四十九日には刑事と一緒に墓参りに行き、犯人逮捕を祈った。だが時間は過ぎ、刑事もやがて退職した。

事件から25年以上がたった。大学を卒業した後は通訳などとして働き、5年前にワインの輸入会社を立ち上げた。48歳になった今でも、仕事でつまずくたびに順子の顔が浮かぶ。

大人になってわかったことがある。かなえない夢から逆算して自分が今やるべきことを考え、10代のころから努力していた順子が、どれだけの力か。

ただ真面目で成績が良かったんじゃない。ジャーナリズムに本当に関心があって、知識を身につけてたくて、だから周りの誘いにも流されなかったんだ。

5年前、生まれたばかりの娘を連れて順子の実家を訪れた。和室の仏壇には、21歳から変わらない笑顔があった。

事件のことを世間が忘れれば、そういう世の中なんだと犯人も思うし、別の犯罪を起こすかもしれない。「一生忘れられないなんてないんだ、逃げられないんだと信じ続けたい」

上智大4年の小林順子さん(当時21)は96年9月9日夕、東京都葛飾区の自宅で首を刃物で刺されて殺害された。自宅も放火されたが容疑者は特定されず、事件は未解決のまま。

事件当時、殺人事件の公訴時効は15年だったが、小林さんの父、賢二さんから殺人事件被害者の遺族でつくる「宙の会」が時効撤廃を求めて活動し、2010年の法改正で実現。現在も捜査が続いている。

現場には犯人のものともみられる血痕が残されており、A型の男性のDNA型が検出された。犯人が小林さんを殺害した際にけがをした可能性があるという。事件前には複数の住民が黄土色のコートを着た身長約150〜160cmの男を周辺で目撃していた。情報は亀有署(03・3607・0110)へ。

(遠藤英波)